

第Ⅱ群 座長のまとめ

帝 京 大 耳鼻咽喉科
鈴 木 淳 一

鼻腔気流動態については、むかしからの研究もあるが、今回新しい測定装置、レーザードップラー法による測定結果が紹介された。3倍大のモデルによるもので、討論にあるように、実際の鼻腔の状態は千差万別なので、このさい、基本的結論だけでも明快なものがえられれば大へん有難いことであると思われた。

耳鼻咽喉科のエアロゾル療法のポイントの一つ副鼻腔炎について、兵氏のグループの熱心な一連の研究である、中耳腔への到達も討論された。少なくとも耳管への到達があれば、耳管・中耳への影響は期待できるであろう。

ポンプ機能を備えたという新しいネブライザーも、先の演題と同じく、上気道に属する深部の病巣への薬液到達を目的とした研究で、この方面の専門家の協力をえて進められている。何れにしても、むかしの陽圧・陰圧法が用いられなくなった今日、これに代るべき、新機能模索の一端で、今後の発展を望みたい。